

ROTARY CLUB OF NAGOYA MEINAN 2013-2014 WEEKLY REPORT

ロータリーを
実践し



みんなに
豊かな人生を

名古屋名南ロータリークラブ

■承認 / 1991年3月8日 ■例会日 / 火曜日・PM6:30 ■例会場 / 名古屋マリオットアソシアホテル
■会長 / 白藤 憲雄 ■幹事 / 本多 利郎 ■会報・雑誌・広報委員長 / 安藤 修
■事務局 / 〒450-6002 名古屋市中村区名駅1丁目1番4号 名古屋マリオットアソシアホテル 2202号
TEL.052-586-2043 FAX.052-586-2054

URL <http://www.meinan-rotary.com> E-mail info@meinam-rotary.com

2013-14年度 国際ロータリー会長 ロンD.バートン

第1071回

2013年11月19日(火) 晴 第19回

～ロータリー財団月間～

斉唱	それこそロータリー
出席	会員55名(出席率算入人数45名) 出席27名 出席率60.00% 前々回補填率96.00%(11月5日分)
ゲスト	公益法人 名古屋獣医師会 理事 柴田恵美子さん 米山奨学生 林 怡伶さん

副会長あいさつ

副会長 榊原 和美さん

皆さま、こんばんは。白藤会長に代わりまして、あいさつさせていただきます。

ゲストに柴田恵美子さん、米山奨学生の林怡伶さん、歓迎致します。ごゆっくりご歓談ください。

昨日、会員の小山慎介さんが亡くなりました。小山さんは2006～2007年の会長を務めていただき、現在は地区会員増強のリーダーをしていただいております。又、囲碁クラブにも入っていただいております。以前は合宿にも参加をして、楽しい日々を過ごした思い出があります。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

今日は、私の趣味の延長線上の「歩き」についてお話をしたいと思います。人間生まれてから誰かに教えてもらう訳でもなく歩き始めます。私はどうしたらうまく歩けるのかといつも考えながら歩いています。ゴルフと一緒に、調子の良い日と悪い日があり、うまく歩ける日と歩けない日があります。最近気づいた事がありまして、つま先を少し内側に入れるような格好をしますと、自然に背筋がピンとします。その格好で歩くと、膝への負担も少なく、楽に歩けます。

先日、台湾へ旅行に行きました。そこで、衛兵が立っているのを見ました。足元を見てみると、やはりつま先が内側に入る感じになっていました。この体勢は人間が最も姿勢が良くなる形ではないかと思えます。このように私は最近歩くときは出来るだけ姿勢良く歩くようにしています。ガニ股で歩くのが一番足に負担が掛かるという事ですので、皆さまも気をつけてみてはいかがでしょうか。



副幹事報告

副幹事 児島 徳和さん

1. 11月23日・24日は地区大会になっております。出席予定の方には事務局より名札が送られていると思います。当日、忘れずに会場へご持参ください。

ニコボックス

- ◆ Doctor 柴田恵美子 今日「動物介在教育について」日頃の試みから、我々を大きな子供と思ってよろしくお願ひ致します。 三浦 隆さん
- ◆ 本日の卓話をして頂く柴田恵美子先生をお迎えして。

坂田 信子さん 佐々木 暢さん 中村 勝さん
伊藤 圭一さん 児島 徳和さん 浅井 浩さん
新原 尚さん 犬飼りさ枝さん 牧野 好弘さん
大平 明子さん 久米 伸治さん 長尾 浅吉さん
榊原 和美さん 安藤 修さん 田中 一雄さん
杉山 隆秀さん 木下 福郎さん 鈴木 清詞さん
中西 芳子さん 三島多恵子さん 出田真太郎さん
武藤 正行さん 川辺 清次さん

本日合計 30,000円 累計 563,000円

アンチエイジングエクササイズ

中村 勝さん

外部卓話

三浦 隆さん

皆さま、こんばんは。今日のゲストは柴田恵美子さんです。中川区で開業され、とても若く見えますが、獣医の学校へ通っている立派な息子さんがみえます。

公益社団法人名古屋獣医師会の理事で、市立小学校で生活科の授業、飼育動物の飼育指導や診療、教員向けの動物介在教育のセミナーの立ち上げなど、全国的に広がりを進めている方です。

今日は公益法人として、動物行政の指導的立場から日頃の活動をお話していただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

■公益法人 名古屋獣医師会

理事 柴田恵美子さん

本日は動物介在教育についてお話をさせていただきます。「日本の小学校では何のために飼育するの

ですか?」という言葉は私はよく使わせていただきます。この言葉は実は、小学校の教頭先生からいただいた言葉です。先生方が普段学校で動物を飼育しているにも関わらず、何のために飼育するのだろうと疑問になっているという話から始まっています。私たちはちょうどその時、獣医師会の方で学校飼育の支援をしようという事になっていました。そこで、教員の方のセミナーから実際に学校の中に入り、低学年の生活科の授業を行ったり、児童飼育委員会で飼育指導もしています。実際、学校の先生方はウサギを触る事も、もちろん抱くことも出来なかったり、何を与えていいのかも分からない状況で活動させている事が多く、私たちが入る事で、「助かりました。」と言っていただく事も多いです。



名城小学校では立派な飼育小屋があるのに、動物が居ませんでした。そこで、獣医師会の方で会員の協力を得て、ウサギ2羽ゆずり受けて、飼育指導をしました。

帝京大学の矢野教授は「最近の子供、おかしいと思われませんか?」とおっしゃっていました。先程もお話しましたように、先生方は「なぜ、学校で動物を飼育をしているのでしょうか?」という事をはっきりご存知ではありません。

最近、色々な事件を聞きますが、子供を取り巻く社会問題が大きく報道され、青少年の自殺問題が大きく取り上げられるようになりました。問題点は、いじめや先生による行き過ぎる体罰などが原因になっています。それから、受ける側にも問題があり、自分自身の命を軽んじてしまう、簡単にそういう発想になってしまう事が原因ではないかと思えます。

近年の犯罪と社会問題では、DV、青少年犯罪の低年齢化、老人虐待、動物虐待、いじめ、自殺、老人の孤独死など、それぞれの生命の尊重が欠如されていると思われれます。なぜこのような事が起こるかと言うと、「今、人が壊れようとしている」とありますが、子供にすれば、命がわからない為、自己中心的な行動を取ってしまう。友達とコミュニケーションが取れない、そんな子供たちが増えています。

このような社会的子供の問題に対してどうすれば良いのか考えますと、心理学の問題になりますが、愛情と共感を培う周りのサポート、命の大切さを学ばせる、友達などの周りとのかかわる楽しさを感じる。これは、神経回路、脳の回路を発達させる事が必要になってきます。犬を飼った事のない子供が抱こうとすると、犬は下手な抱き方をすると逃げてしまいます。そこで、子供はどうしたら上手に抱かせてくれるか一生懸命考えます。この時、大脳前頭連合野が働き、脳が発達します。もっと小さい赤ちゃんは、犬と触れ合う事で、ぬくもりや臭いを感じたり、毛の感触を感じます。毛が顔に触れる事で大脳を刺激します。それから、子供は動物好きです。初めはお互いに警戒していて、子供も触りたいけど、触れません。しかし、時間が経つにつれてすぐに仲良しになってしまいます。子供は簡単に動物とお友達になれるという事です。

平成16年の少し古いデータですが、どれくらいの小学生の家庭で動物を飼育しているか調査した所、50%位の家庭で動物を飼育していました。その多くが魚でした。その次に犬・猫、次に小動物、小鳥等でした。欧米諸国に比べて犬や猫を飼っている割合は少ないと思います。

学校で飼育している動物達を、家で飼えない家庭の子供達の為に上手く活かして行こうという私たちの試みです。子供への飼育動物の影響を考えますと、1.動物が可愛くなり、大事な存在になる。動物のために考えたり、どうやって小屋を作ろう、どんな食べ物が美味しいかなど、一生懸命考え大事な存在になっていく事を飼育動物は教えてくれます。2.動物を介在しての三項関係をつくる。人間1人では生きていけません。親や友達、先生がいる中でコミュニケーションが取れるようにしてあげるのにも、動物はいい役割を示してくれます。3.心的視点移動。思いやりを持つ事によって、みんなと協力しあい人の気持ちがわかってくるという事です。なにより子供にとって動物は魅力的で入りやすい存在です。但し、魚では駄目です。感情が読み取れるような哺乳類や、ニワトリやチャボなどの感情が豊かな動物を飼育していただく事が重要です。

心を育てるのに10歳までの教育が必要だと言われています。10歳ですと、3年生、4年生の年齢になります。この時期は体や精神の発達にとってもいい時期にあたります。その時期に動物を飼育して色々な事を教育する事によって神経回路がよく発達し、情緒の発達していく子供に育ちます。それから、小さい子供にとって、大事にすれば愛情を返してくれる身近な動物たちとの関わりは、命を理解し、「交流する喜び」を与えてくれる体験になるという事です。机の上での勉強は体験ではありません。それは記憶に留まらないという事です。

私が今勉強しているのが、動物介在教育Animal Assisted Education略して(AAE)です。日本においては、学校や幼稚園で飼育されている動物を効果的に利用して、子供達に生命尊重の教育や情操教育に役立てる事です。諸外国では少し違うようです。

今年の夏、IAHAIO(人と動物の関係学会)の為にシカゴへ行ってきました。そこで、チューリッヒからお見えになっている、デニスパーナー先生とお会いして、お話しさせていただきました。世界中から主に心理学者など沢山の人が集まり、動物を使って社会をよくしていこうという学会になっています。私たちが行っている学校獣医師としての活動目的は、「情を通じる飼育」を指導していく事です。私たちは教育者ではないので、飼育のお手伝いをさせていただいています。また、人と動物にとって心地よい環境管理法を伝え、実現するように支援しています。

現在、獣医師会と連携して、学校獣医師として支援させていただいている自治体が段々増えてきています。事例では、東京の小学1年生がモルモットの「ピノちゃん」を学年飼育する事になり、動物日誌をつけました。飼い始めた6月の絵では、お芋さんのようなモルモットに対して、10月の絵では食べ物や目、鼻、口、足があり、生きている状態の絵が描けるようになります。これは机上の勉強ではできない事だと思います。中には感情の様子を描く子も

出てきました。そして、感情だけでなく、理料的な様子も描けるようになります。更に日誌をつける為にデジカメも使えるようになり、ピノちゃんが怖がるので、フラッシュはたかないようにするなど、思いやりの心を持って飼育している様子が分かります。但し、学校での飼育動物は継続して飼育する事が必要です。レンタル動物や移動動物園ではいけません。そこで、一緒に暮らして、病気の時は介護をしてあげる事が重要です。ウサギの寿命は7年位ですが、年を取って亡くなってしまうというその姿を見て育ってもらわなければなりません。

ただ学校の先生方が問題にしているのは、飼育は面倒という事です。先生方は専門的な知識がないので、飼育が楽しいものという風に変えていくお手伝いをしています。笑い声のもれる楽しい飼育にすれば、児童飼育委員会は楽しいものになると思います。その為には、掃除しやすい小屋。コンクリート床にする事をお勧めしています。世話の簡単な動物種を選ぶなど特にウサギは簡単だと思います。繁殖制限をして、増えないように飼う。これに関しては、獣医師会の方に協力を求めてもらう事になります。休日の世話は名古屋市ではほとんどが置き餌になっていますが、きちんと指導されている自治体では当番の子の家でホームステイをしたり、ボランティアを募り、親と共に学校へ行き世話をする自治体もあります。子供が学校でどういう事をしているのか実際に見る事ができるので、良い方法ではないかと思えます。

基本的には子供に楽しみを持たせる飼育をしなければいけません。その為には、飼育に興味を持つよう触れ合いをさせています。学びの三角とは、体験というのが必ず根底にあり、色んな知能が発達していきます。子供は触ってこそ、情が動きます。ある小学校でチャボをつがいで飼っていました。奥さんの方が危篤になり、獣医師が子供達にどうしてあげたいか聞くと、旦那さんを連れてきてあげようという事になりました。チャボは家族愛が強い鳥で、必ず雄が雌を守ります。この雄のチャボも雌が亡くなるまでずっと傍にいたそうです。亡くなった後、どうして亡くなってしまったかをちゃんと子供達に説明しています。そして、遺体にもちゃんと触れてもらっています。これがとても大事な事だと思います。先生によっては、死んでしまった事や、遺体を隠してしまう事がありますが、決して良い事ではありません。日々の飼育を通して何を身に付けていくか、動物と触れ合う事で、思いやりを持ち、あるいは友達と良い関係を持ち、その中で自分を発見していくという事になります。

モルモットはアレルギーの多い動物種なので、飼育できないという先生もみえますが、アレルギーは個人の課題です。一生アレルギー体質を持って生きて行くわけですから、自分で解決しなくてはならない問題です。世界的にアレルギーの少ない子というのは、兄弟の多い子、牧場の子、途上国の子と言われています。つまり、清潔すぎる環境を子供に与えては、アレルギーが増えるばかりだという事です。楽しい飼育こそが本来の飼育の姿だと思います。

名古屋市獣医師会ではどのような事を行っているのか説明させていただきます。児童飼育委員会に飼育指導をしています。子供にプリントを配り、ウサギはどのような動物か、何を食べて暮らすのか、寿

命、歯の数、触り方など簡単な事を教えています。それから、生活科の授業で、低学年に動物ふれあい教室をしています。まず、ウサギのからだと習性をプレゼンテーションで勉強します。その時に必ず心音を聞きます。心臓の音を聞くことによって生きている感覚を分かってもらいます。その後に触れ合いますが、みんなとてもワクワクしていて、つい大声を出してしまう子もいます。触れ合った後に「質問がある人はいますか?」と聞くと、みんな手を上げてくれます。まだ低学年なので、手を上げただけの子や質問内容が分からなかった子もいますが、ほとんどの子が「温かった」とか、「ふわふわして気持ちよかった」と言ってくれます。私はそれで十分だと思います。

別の小学校で、ウサギを飼わずにどう教育に役立てようかという事で、春と秋に2回動物ふれあい教室を行い、子供達の考えた方がどう変わっていくかを見ようとしています。1回目に一般的なふれあい教室をしました。触り方を教えて、危なくない触れ合いをしています。先生が出した課題は、疑問点と答えです。1年生なので、「もやっとぼいんと」と「すっきりぼいんと」と言っています。自分達で、問題点を見つけ、自分達で答えを見つけてほしいという事でした。2回目の秋のふれあい教室は夏休みに課題が出されました。春と秋の違いをウサギで感じる事ができますか?ウサギがしてほしい事・してほしくない事はなんですか。この2つです。子供達は一生懸命考え、その後に獣医師が答えのお手伝いをしました。2回のふれあいの後に書いた作文には、だいたいの子が、「クッキーちゃん来てくれてありがとう」、「抱っこさせてくれてありがとう」、「また来てね」という内容でした。保護者の方からも感想をいただきましたが、評判はよかったです。

次に2年生の動物ふれあい教室では、アレルギーを持つ子も参加しました。アレルギーだから触れないのではなく、方法を考えれば触れるという事で、マスク、手袋、エプロンをして触れ合いをしました。触れ合いの後に絵を描いてもらうと、色彩鮮やかな絵になりました。そして、自分やお友達も描いてくれています。担任の先生から、「命の大切さ、命の重さを子供達が実感する事ができました。」「多くの事を学ぶ事ができました。」と言っていました。ご清聴ありがとうございました。

第 1073 回例会 (12月3日) のご案内

年次クラブ総会

(次年度理事・役員承認)